

今回のトレーニング犬



シャイン

Training

セラピードッグへの道

セラピードッグの
基本トレーニング

今回のテーマ: **脚側歩行(きゃくそくほこう)**

- 脚側歩行とは** トレーナーの左側を歩かせること。
- 目的** トレーナーの左脚側に付いて、トレーナーの歩調に合わせて歩く。
- 目標** トレーナーの動きに合わせて、歩行を行うことができる。

Step1~4を繰り返し
トレーニングします。
できるようになったら
場所を変えて実施
しましょう。

Step1

集中させる



リードをつけた犬と目を
合わせて、集中させます。

Step2

脚側に付かせる



犬の鼻先に、ルアー(視符。その子が
大好きなおやつ・おもちゃなど)を見
せ、ハンドターゲットを示して脚側
に付かせます(前回参照)。できたら、
しっかりほめます。

Step3

歩く



犬とアイコンタクトを取り、「行くよ!」
という意志を伝えながらトレーナー
のタイミングで歩き出します。歩いて
いる間はできるだけリラックスさせ、
アイコンタクトを取りながら、リードが
張らないように気を付けます。

Step4

止まる



人の動きにあわせて止ま
るように、進んでは止まる
練習をします。距離はその
都度、臨機応変に変更し
ます。

よく
できました!



ポイント

- 1 犬がリードを引っ張ると、一緒に歩く方が引っ張られて転倒する危険があります。ドッグセラピー事業部のセラピードッグは、リードを引っ張ることが絶対に起きないようにダブルリードで行っています。
- 2 うまいかなくても焦らない事。犬も「どうしたらいいかな?」と考えているので、人間の方も「できる」と信じて待つことが大事です。
- 3 犬の様子をしっかり観察し、集中が切れていたり、疲れたりしたときは休憩させて、しっかり触れ合ってください。
- 4 ドッグセラピー事業部のセラピードッグは、人の左側だけでなく、右側も歩けるようにトレーニングしています。どちらが麻痺側でも対応できるようにしています。

☆ドッグセラピー事業部では☆

ドッグセラピー事業部のセラピードッグとセラピストは、毎回、笠木恵子先生(My Dog Training School 主宰・家庭犬訓練士)のトレーニングを受けています。ドッグセラピー事業部は、ドッグセラピーが介護保険に収載されることを目指して活動しています。その活動の一環として、セラピードッグ養成マニュアルの作成にも取り組んでいます。



指導を
受けています

笠木恵子先生(右)
My Dog Training
School 主宰
家庭犬訓練士

(お問い合わせ)

有限会社かりゆし ドッグセラピー事業部

〒701-1333 岡山県岡山市北区立田587番地
TEL.086-905-0111(直通) FAX.086-287-8261
E-mail. dog_therapy@ikenaga-group.jp

http://www.therapydog.jp



燦々 Sansan

有限会社かりゆし
ドッグセラピー事業部 会報誌

Vol. 15 / 春号
2014年

Contents

- 理事長ごあいさつ
- 活動報告
- 特集: 生長豊健理事長インタビュー
- トレーニング: 脚側歩行

【理事長ごあいさつ】

2015年度介護保険制度改正に向けて 大きな一歩となる研究報告を厚生労働省に提出

私たちは昨年、ドッグセラピーによる「認知症高齢者のリハビリテーション効果」に関する調査結果を厚生労働省に提出しました。このデータは、2015年度の社会保障審議会で介護保険制度を見直す際に、有効な資料として活用されます。そこで私たちは、今回の調査研究を数々の学会で報告したところ、多くの研究者から賞賛とアドバイスをいただく

ことができました。

これらの経験を活かし、2014年度には、より明確な効果を訴求できる研究結果をまとめられるだろうと期待しています。皆様には引き続き、私たちの研究活動にご関心をお寄せいただけますようお願い申し上げます。募金やボランティアなど、ご協力をいただきました皆様には、深く感謝申し上げます。



理事長 生長 豊健

医学博士
日本内科学会認定内科医
岡山県認知症サポート医
医療福祉法人雄風会理事長
社会福祉法人義風会理事長

【活動報告】

開催日: 2014年2月21日(金)

第40回 岡山県老人福祉施設職員研究発表会

岡山県老人福祉施設協議会主催の「平成25年度(第40回)岡山県老人福祉施設職員研究発表会」が、岡山コンベンションセンターで開催されました。ドッグセラピー事業部セラピストの渡邊真梨子が第2分科会(約140名参加)に出席し、「ドッグセラピーによるリハビリ効果の検討」と題した研究発表を行いました。助言者として参加された川崎医療短期大学准教授の山田順子氏からは「科学的に結果を出していきやすい」という講評をいただきました。また、山田先生は、ドッグセラピー事業部の論文を事前に読んでくださった上で「論文にあったように、介護度や認知症以外の疾患との関係が、どう改善したかも合わせて発表すると、より分かりやすいのではないかとご指摘くださり、高い関心を寄せてくださいました。

私たちの研究は、岡山県老人福祉施設協議会の推薦を受けて、平成26年9月4日(木)、5日(金)に鳥取県米子市で開催される「第46回中国地区老人福祉施設研修大会」で発表させていただくことが決定しました。



2012年-2013年の研究活動を振り返って
平成24年度 厚生労働省採択事業

「ドッグセラピーによる 認知症のリハビリ効果」調査研究

生長 豊健

ドッグセラピーによるリハビリ効果を 治験を参考に統計処理

私たちは、軽症から重度まで、約300人の認知症高齢者のお世話をしています。長年、数多くの認知症高齢者を診てきた私は、多くの患者が「言葉による意思疎通がうまくできないためにリハビリをする上で困難が生じている」と感じていました。理学療法士や作業療法士がリハビリを行うとき、彼らは言葉で指示します。しかし、認知症高齢者は言葉による意思疎通が難しいため、十分なリハビリを行えないことが多いのです。リハビリができなくて筋肉を十分に使えないので、少しずつ筋力量が落ちてしまいます。すると、日常生活動作(ADL)が減少し、寝たきりになる可能性が高まります。

ところが、ある認知症患者が、スタッフの指示ではまったく運動しないのに、ドッグセラピーによって犬との関係づくりができたなら、犬のリードを見ただけで「それを私に貸しなさい。私が散歩に連れて行く」と言い、自分で歩き出したのです。この現象は、私の心に強烈な印象として残っていました。

ドッグセラピーは認知症患者のリハビリに使えるのではないかと考えた私は「ドッグセラピーによる認知症高齢者のリハビリモデルを構築してみたい」と考えるようになりました。その発想と、平成24年度の厚生労働省「老人保健健康増進等事業」の研究テーマのひとつである、「認知症ケアモデルの検討とその人材育成に係る研究事業」が一致しました。これに応募したところ、ドッグセラピー事業部の「ドッグセラピーによる認知症高齢者に対する生活意欲の向上とリハビリテーション効果の調査研究」が採択されることになりました。

ここで、どのような調査手法が有効であるか、私たちは各方面に相談しました。私たちは創立以来、著効例の症例報告を地道に積み重ねて参りました。ところが学会は1例報告をエビデンス(証拠)と認めないため、私たちの症例報告は学会に認められてきませんでした。そこで、今回の調査研究に



Miruru



Hina



Sweet



Melon

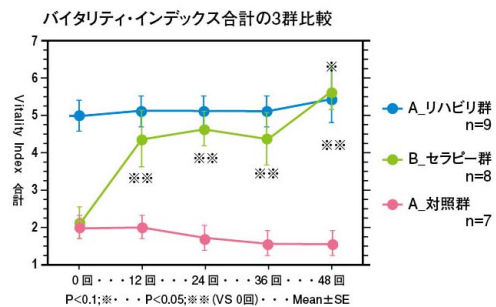


Yuki

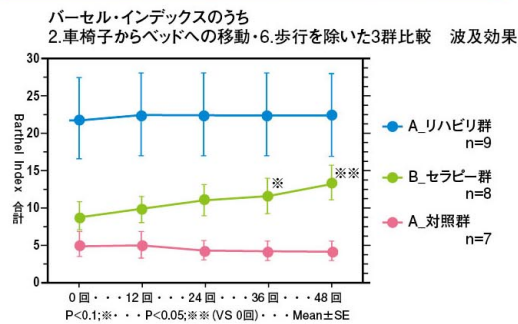
においては、厚生労働省が新薬を認証する際に行う治験を参考に、科学的な統計処理を実施することにしました。私たちは、同意を得られる認知症患者の中から、専門職員によるリハビリが可能で「リハビリ実施群(A)」10例と、リハビリが困難だがドッグセラピーが可能な「ドッグセラピー実施群(B)」10例、リハビリもドッグセラピーもできない「対象群(C)」10例の合計30例について、経時的な病態の統計処理とグループ間比較(群間比較)を実施しました。これにより、症例数は少ないけれど、「認知症高齢者のリハビリにドッグセラピーが有効である」という調査結果を報告することができました。

また、私たちは、このレポートを数々のシンポジウムや学会で発表しました。世界中の研究者が認知症研究に行き詰まっている現在において、私たちが一定のデータを提出することができたことに対し、多くの研究者は愕然としていました。

ドッグセラピー実証群(B)の意欲が向上



ドッグセラピー実証群(B)の機能が向上



2013年3月には、広島で開催された「日本畜産学会」で、私が「動物介在医療法の実践現場から～介護保険収載を目指して～」と題した発表をしました。出席者の東京農業大学農学部教授の林良博氏(元東京大学理事・副学長、人と動物の関係学会創立発起人代表・元会長)は、私たちの研究を「レベルが高い」と評価してくださいました。出席していた他の研究者からも「他の施設ではデータ採取や症例報告すら不可能」「調査研究という方向性を持った施設は他にない」「ドッグセラピーを実施している施設の多くはCAPP(人と動物のふれあい活動)でレクリエーションのレベル」だと伝えられました。また、経時的な症例変化の報告と、さらに1歩進んだグループ間比較について賞賛していただけました。これは、私たちの優秀なスタッフの努力の結晶であり、私たちが支援してくださっている皆様のおかげであると感謝しています。

2014年度の 新たな取り組み

ある学会で発表した際、出席者の方から「世界初の研究なのだから、自分達の基準を作って自分達のペースで研究を進めたらどうですか」と助言していただいたことがあります。実は、私たちの研究には参考となる指標がほとんどありません。他に研究例がないのだから仕方ありません。現状では、バイタリティインデックス(意欲の指標)や、バーセルインデックス(機能的評価指標)など、世間一般に普及している指標を代用しています。介護関係者に説明するには、この指標が分かりやすいのです。しかし、認知症の方に対するドッグセラピーの効果の指標としては、これらは最適ではありません。将来的には、ドッグセラピー事業部独自の評価法を確立する必要があるかもしれません。そういった「評価法」の確立に着目し、2014年度は新たな2つのテーマに取り組みます。

1つ目は、犬との関係づくりの確認について。私たちは、認知症患者が、犬と会った時の「目の動き」や「目の光り方」によって、その患者が犬との関係づくりができるかどうかを見分けています。そういった「目の光り方」や「瞳孔の大きさ」をデータ化することに着目した調査研究を進めたいと思います。

2つ目は、認知症患者の情動やモチベーションに関する研究です。過去に、私が「新規の記憶が脳の中に入らない」と判断した患者の中で、犬の名前を覚えたり、犬に名前を付けたりした患者がいらっしゃいます。さらに、この患者は「この前は犬と◎◎をした」と過去の経験を覚えていました。この症例について、私はある仮説を立てています。その内容は「認知症患者は、たとえ知力が落ちても、好き/嫌い、楽しい/悲しいといった情動を司る脳の働きは案外落ちないのではないか。犬との関係づくりができたなら患者の情動の中核が反応し、脳に向かう種々の賦活作用(活発にする働き)を持たずのではないか」というものです。この仮説を、MMSE(認知機能検査)を使って検証したいと思います。



Shine

- 2013年度の学会等発表
- 「日本畜産学会 第116大会」(広島市) 2013年3月27日~30日
 - 「第24回 全国介護老人保健施設大会 石川in金沢」2013年7月24日~26日
 - 「第27回 中国ブロック理学療法士学会in米子」2013年9月1日
 - 「第8回 老人保健施設中四国ブロック大会」(高松市) 2013年9月23日
 - 「第40回 岡山県老人福祉施設職員研究発表会」2014年2月21日

*MMSE=Mini Mental State Examination (ミニメンタルステート検査)の略
米国のフォルスタイン夫妻が1975年に考案した世界で最も有名な知能検査
*CAPP=Companion Animal Partnership Program (人と動物のふれあい活動)



Kibi